

PRESS RELEASE

【報道関係各位】

生誕185年

RENOIR

ルノワール展

2026年

3月1日(日)～7月31日(金)



山王美術館

SANNO ART MUSEUM

〒540-0001

大阪市中央区城見 2丁目2番27号



山王美術館一春・夏季コレクション展2026

ピエールオーギュスト・ルノワール《噴水による浴女》1914年 山王美術館蔵

開催趣旨

生誕185年

RENOIR
ルノワール展


山王美術館
SANNO ART MUSEUM

おそらくルノワールは 悲しい絵を一度も描かなかった 唯一の偉大な画家でしょう。

Octave Mirbeau, “Renoir”, Bernheim-jeune, Paris, 1913

フランスの小説家オクターヴ・ミルボーが、1913年に出版されたピエール＝オーギュスト・ルノワール（1841-1919）の画集に寄せた言葉です。ルノワール自身もまた、いやなことが多い人生において、絵画は「愛すべきもの」「愉しく、美しいもの」でなければならないと、晩年に語っています。60年におよぶ画家生活のなかで、肖像、風景、静物、家族、裸婦とさまざまな主題に取り組んだルノワールですが、すべてに共通しているのは、温かく、愛情に満ちた眼差しが注がれているということでしょう。ルノワールにとって、生きることは描くことであり、描くことは悦びであったといえます。

前衛的な画家グループである印象派を出発点としながらも、絵画の伝統に学び、つきることなく探求をつづけたルノワール。生誕185年を記念した本展では、山王美術館のコレクション約50点を一堂に公開し、その画業の一端を辿ります。

光と色彩、生きる歓びにあふれたルノワールの世界を、ぜひお楽しみください。

みどころ

生誕185年

RENOIR ルノワール展

1 山王美術館ルノワール・コレクションを一堂に公開

山王美術館は、50点を超えるルノワール・コレクションを収集しています。

ルノワールの生誕185年を記念した本展では、初公開作品11点を含む、全コレクションを一堂に展示いたします。なかでも、《噴水による浴女》（1914年）は、大原美術館所蔵の《泉による女》（1914年）、その先行作品ともいえる岐阜県美術館所蔵の《泉》（1910年頃）と、同主題によるものです。「自然のなかの裸婦」という伝統的主題を探究し続けたルノワール。生命感にあふれたこの裸婦像は、ルノワールが到達した新しい表現といえます。これ以降に展開した、さまざまな赤の色調にあふれた、まるで生命の輝きそのものを表わすかのような裸婦像も、あわせて展覧いたします。

Topics | 《噴水による浴女》1914年

噴水のかたわらに座る裸婦像。豊かな髪を右手でおさえ、左手は滔々と流れる水を受けとめています。大原美術館・岐阜県美術館所蔵の作品は、白い布で覆われた膝上からの構図ですが、当館所蔵作品は全身像で描かれています。そのため、裸婦が身を置く、緑豊かな周辺環境がより明確に表現されています。画面全体をつつむ柔らかな光が、水の流れや樹々の葉、髪に反射しており、裸婦の肌は丹念に重ねられた筆致により透明感に満ちています。時に古典に立ち返りながらも、画家として新たな様式を試みつづけたルノワールの姿勢は、ピエール・ボナール、アンリ・マティス、パブロ・ピカソら、次世代の画家たちに大きな影響を与えていくこととなります。

なお、本作はルノワールの絵画を愛した画商の一つである、ベルネーム＝ジュヌ画廊の経営者一族であるジョスとガストンのベルネーム兄弟の私邸に、個人コレクションとして一時期飾られていました。

2 花、風景、静物、裸婦、装飾画…バリエーション豊かな主題の数々

ベルネーム＝ジュヌ画廊編纂（2007～2014年）による5巻におよぶ、ルノワールのカタログレゾネには、油彩、パステル画、素描、水彩画あわせて4,517点もの作品が掲載されており、花、果物ある静物、風景画、人物のある風景、神話の場面、赤ちゃん、子ども、少女、女性、裸婦像と、52ものテーマに区分されています。

このように、長い画家生活のなかで多岐にわたる主題に取り組んだルノワールですが、いずれの主題においても共通しているのは、愛情に満ちた、温かな画家の眼差しが注がれているということでしょう。画家ルノワールにとっては、描くことは喜びであり、絵画は愉しく美しいものでなければならなかったのです。本展では、風景、バラやアネモネなどの花、静物、裸婦、そして装飾画まで、幅広く展示いたします。



広報用画像 1

初公開

《噴水による浴女》1914年、山王美術館



（左）広報用画像 2

初公開

《帽子で装うリディア》1917年
山王美術館

（右）広報用画像 3

初公開

《緑の花瓶のバラ》1910年頃
山王美術館

みどころ

生誕185年
RENOIR
ルノワール展

3 コレクション約50作品で追う、ルノワール創作の軌跡

印象派時代の女性像から、「印象主義の行き詰まり」を感じ古典へと回帰したアングル時代、「自然のなかの裸婦」という伝統的な主題に取り組み始めた南仏時代、さらに晩年に開花する豊潤な色彩による作品群まで、50年以上にもおよぶ画業の一端を5章に分けて辿ります。



【1章】
～1880年
画家をめざして



【2章】
1881～1889年
古典への回帰



【3章】
1890～1900年
高まる評価のなかで



【4章】
1901～1909年
南仏・カーニュの地にて



【5章】
1910～1919年
生命の讃歌

1841年	0歳		2月25日リモージュに生まれる
1844年	3歳		一家でパリに移住
1854～58年	13～17歳		磁器絵付師の工房に徒弟奉公する
1861年	20歳		シャルル・グレールの画塾に入る
1864年	23歳		サロン初入選
1869年	28歳	印象主義的技法誕生	モネとともにラ・グルヌイエールで制作
1874年	33歳	印象主義の時代	第1回印象派展
1878年	37歳		サロンに再出品し入選
1879年	38歳	肖像画家として人気を博す	《シャルパンティエ夫人と子どもたち》サロンで評判を呼ぶ
1881年	40歳		アルジェリア、イタリア旅行
1883年	42歳	古典様式への傾倒 「アングル時代」	この頃、印象主義の表現に行き詰まる
1887年	46歳		新様式による《大水浴》発表、賛否両論を生む
1890年	49歳	真珠色の時代	最後のサロン出品
1892年	51歳		《ピアノを弾く少女たち》が国家買上げとなる
1897年	56歳		腕を骨折、リウマチ発症の原因に
1900年	59歳		レジオン・ドヌール5等勲章
1908年	67歳	南仏カーニュでの制作	カーニュのレ・コレット荘に転居
1910年	69歳		バイエルン旅行から帰国後、車椅子の生活に
1911年	70歳		レジオン・ドヌール4等勲章
1915年	74歳		妻アリーヌ没
1919年	78歳		レジオン・ドヌール3等勲章／12月3日カーニュにて逝去

1章

～1880年

画家をめざして

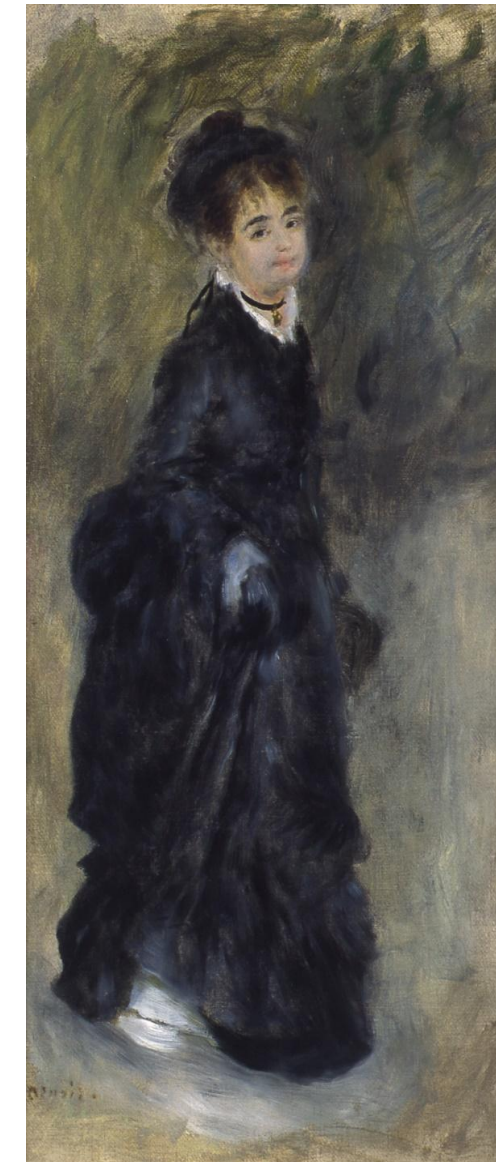
《真面目な絵》を習いに、グレールのアトリエに行った。

ここで、わたしは、生きたモデルを使って、仕事をするのが、出来た。

アンブロワーズ・ヴォラール「発端」『ルノワールは語る』東出版

磁器の生産地として名高い町リモージュに、1841年2月25日に生まれたルノワール。3歳のときにパリへと移り、13歳で磁器絵付師の工房に徒弟奉公します。やがて本格的な画家を志すようになったルノワールは、1861年11月からシャルル・グレールの画塾に学び、アルフレッド・シスレーやクロード・モネら、後の印象派の仲間たちと交友を深めていきました。エドゥアール・マネら先輩画家たちの影響のもと、ルノワールやモネらも外光下での制作を重視した絵画制作を試みはじめますが、前衛的な彼らの絵画は、古典的な様式や技法、価値観を重要視するアカデミスムの規範に外れるとして、サロンへの入選がむずかしい状況が続きます。そこで画家たち自身による作品発表の場として、1874年4月15日、モネ、ルノワールら30人の画家によるグループ展を開催するのです。しかしながら、伝統的な絵画の技法とかけはなれた印象派の絵画は、「未完成」

「下描き」と見なされ、攻撃的に批判・酷評されました。再びサロン（官展）に出品することを決めたルノワール。1879年に出品した《シャルパンティエ夫人と子どもたち》（1878年、メトロポリタン美術館）が高く称賛されたことをきっかけに、一躍人気画家となり肖像画の注文が多く寄せられるようになりました。



広報用画像4
《若い女性》1877年
山王美術館



広報用画像5
《鏡の中の婦人》1877年
山王美術館

2章

1881～1889年

古典への回帰

1883年頃、わたしの作品に現われて来た一種の破綻について、お話ししようとしていた

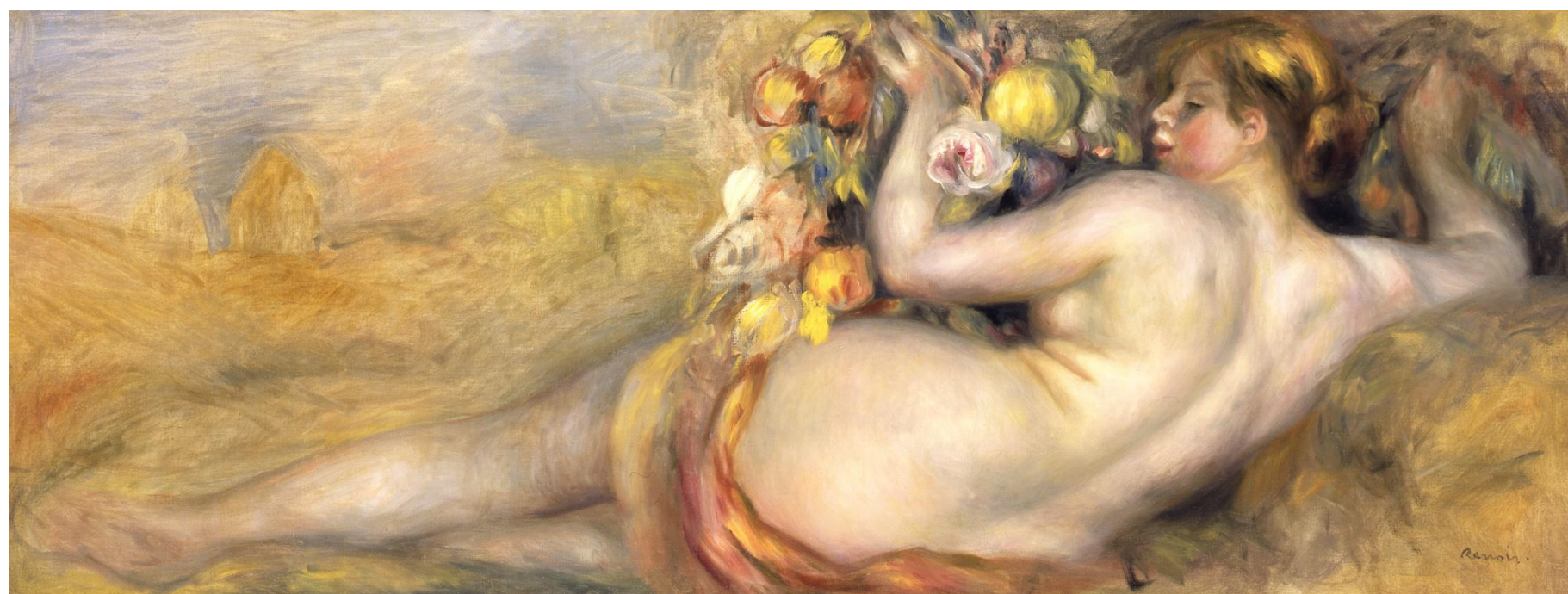
（中略）わたしは、《印象主義》の究極まで行き着いたのだ。（中略）

一言にして申せば、印象主義は、わたしだけのことで、行きどまりになっていた。

アンブローズ・ヴォラール

「ルノワールの鋭い方法」『ルノワールは語る』東出版

サロンでの成功をきっかけに、人気画家として肖像画の注文が増えるとともに、1881年からは画商デュラン＝リュエルが定期的に作品を購入し始めたことにより、ルノワールは経済的な安定を得ることができました。その一方で、制作面での課題を抱えるようになります。あくまでも人物画を描きたいルノワールにとって、輪郭線が風景とまざりあい、形態があいまいとなる印象派の技法には限界があったのです。1881年のイタリア旅行を転機として、古典美術を範とする新たな表現方法に取り組み始めます。ルノワールの試みは、3年もの歳月をかけた意欲作《大水浴》（1884年～1887年、フィラデルフィア美術館）を到達点とします。画家自ら傑作と自負していましたが、従来のルノワール作品を愛する人々からの反応はかんばしくありませんでした。1888年頃のデュラン＝リュエル宛の手紙には、「穏やかで、軽やかな昔の絵に戻ることにしました。もう二度とそこから離れないつもりです」と記しています。



広報用画像 6

《果物をもった横たわる裸婦》
1888年頃、山王美術館

3章

1890～1900年

高まる評価のなかで

少しは賞められたっていいと思うよ。ずいぶん仕事をしてきたんだからね。

アンリ・ペリュショ 『ルノワールの生涯』 講談社

1892年4月、友人のステファヌ・マラルメらの尽力により、《ピアノを弾く少女たち》（1892年、オルセー美術館蔵）が国家購入されるという栄誉にあずかります。さらに同年5月には、デュラン＝リュエル画廊で開かれた大規模な個展が好評を博し、ルノワールの画壇における評価が確立することとなりました。また、1900年に開催された「フランス美術の100年展」では、印象派の勝利が大々的に報じられ、これを機にルノワールはレジオン・ドヌール5等勲章を受章します。家庭面においては、1890年に正式に結婚したアリーヌ・シャリゴとの間に、長男ピエール（1885年）、次男ジャン（1894年）、三男クロード（1901年）が誕生。1894年には家事・育児の手助けのためアリーヌの従妹・ガブリエルが家族の仲間入りをします。ルノワールの新たなモデルとして、家族が描かれるようになりました。愛する家族とともに、充実した日々を送るルノワールでしたが、生涯画家を悩ませつづけることになる悲劇がおそいます。エッソワ訪問中の1897年に、自転車から転落し腕を骨折したことが原因となり、後に慢性関節リウマチを発症するのです。



広報用画像7

《イオカステ（ギリシア神話「オイディプス王」より）》
1895年頃、山王美術館



広報用画像8

《チャペルのある風景》1899年、山王美術館

4章

1901～1909年

南仏・カーニユの地にて

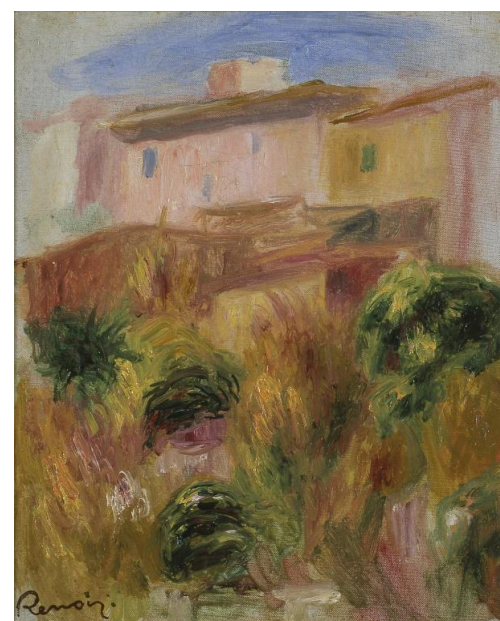
私は赤を、ベルの音のように響き渡
らせたいのです。（中略）今では、
すべてを説明するように求められま
すが、説明できてしまうような絵は、
芸術ではありません。（中略）美術
作品は、あなたを捉え、あなたをそ
れ自体で虜にし、あなたを感動させ
るものでなければなりません。それ
は、芸術家が情熱を表すための手段
なのです。それは、芸術家からほと
ぼしり出て、あなたを彼の情熱へと
誘う流れです。

ジョン・リウオルド『印象派の歴史』角川出版

（左）
《カーニユのラ・メゾン・ド・ラ・ポスト》
1907年頃、山王美術館

（右） 広報用画像 9
《村の入り口》
1900年頃、山王美術館

1897年の骨折をきっかけに発症した慢性関節リウマチは、年を追うごとに症状が悪化し、1902年以降には健康状態が深刻化します。しばしば起こる発作に身体を自由を奪われるようになったルノワールに、医師たちは湯治と温暖な気候の南フランスへの転地療養をすすめました。各地を訪れた後に、カーニユ＝シュル＝メールを転地先として選び、冬をカーニユ、夏をエッソワで過ごし、パリに数週間滞在するという生活となります。当初は、郵便局が入居する貸アパートマン「メゾン・ド・ラ・ポスト」を借り、家族とともに移り住みましたが、1907年には旧市街をのぞむ広大な地所「レ・コレット」を購入し、家とアトリエを新設しました。リウマチの発作と闘いながらも、制作意欲が衰えることはなく、南フランスの明るい陽光とめぐまれた自然環境のなかで、最晩年のルノワールを代表する主題である「自然のなかの裸婦」という伝統的な主題に集中的に取り組みはじめます。



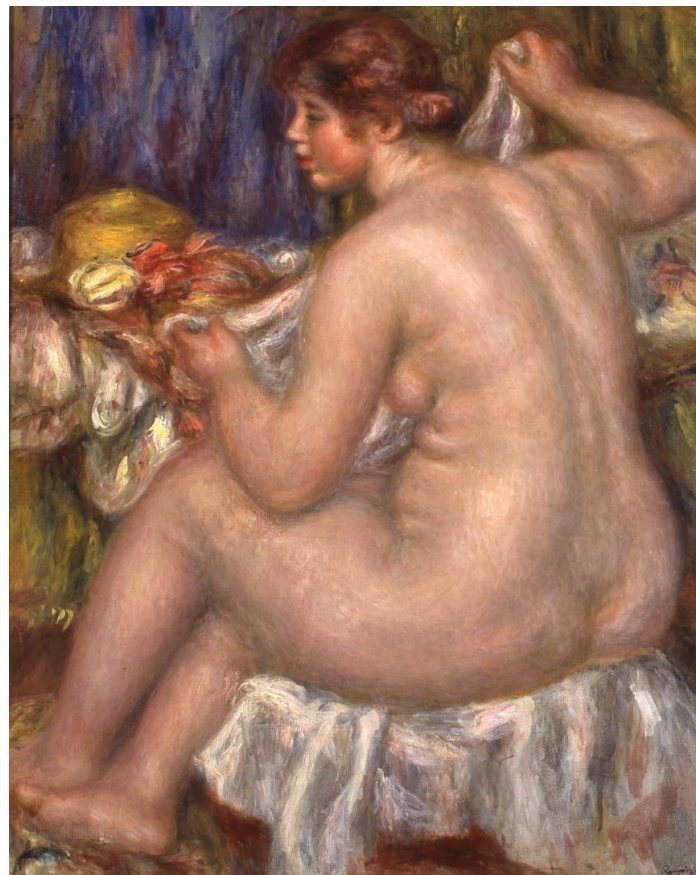
5章

1910～1919年

生命の讃歌

昔の巨匠の絵を見ると、およそ自分がつまらぬ人間に見えてくる。だが、ぼくの作品のかなりのものは、フランス絵画の中で、ある場所を占めるだろうと信じているんだ。ぼくはフランス絵画が好きなんだな。とても優しく、明るくて品がいいんだものね。…それに大袈裟じゃないしね。

アンリ・ペリュショ 『ルノワールの生涯』 講談社



広報用画像10 《裸婦》1918年、山王美術館

1910年のバイエルン旅行から帰国後、ルノワールは歩くことも諦めなければならない状況となり、車椅子での生活を余儀なくされます。2年後にカーニュの家を訪問したデュラン＝リュエルは、「彼は歩くことはおろか、椅子から立ち上がることさえできません。どこに行くにもふたりがかりで運んでいかなくてはならないのです。なんとも痛ましいことです。それなのに、絵が描ける時には上機嫌で、幸せそうな様子でさえあるのです」と、画家の様子を記しています。指が曲がり、筆をとることもままならない状況のなか、ガブリエルや看護師らの手助けを受けながら、1919年にその生涯を終えるまで、ルノワールは精力的に絵画制作に取り組みつづけました。こうして描かれた作品からは、身体的な苦痛や苦悩を思わせる影を感じることはありません。「幸福の画家」と称されたルノワールは、生きる喜びにあふれた絵画を終生にわたって描きつづけたのです。最晩年となるこの時期、赤色の諧調が画面に響きあい、透明感に満ちた、まるで生命の輝きそのものを表わすかのような裸婦像を展開していきました。



(左) 広報用画像11
《裸婦と花の習作》1915年頃、山王美術館

(右) 広報用画像12
《読書(赤とローズのブラウスを着た二人の女性)》
1918年、山王美術館

絵の描き方ってものが判り始めてきたぞ。…
ここまで来るのに50年以上もかかった。まだ充分とは言えないけどね。

アンリ・ペリュショ 『ルノワールの生涯』 講談社

展覧会概要

生誕185年 RENOIR ルノワール展

- ☐ 展覧会名 山王美術館のルノワール・コレクション約50点を一挙公開！
生誕185年 ルノワール展
- ☐ 会期 2026年3月1日〔日〕～7月31日〔金〕
- ☐ 休館日 火曜日・水曜日（ただし、4月29日、5月5日、5月6日は開館）
- ☐ 開館時間 10時～17時（入館は16時30分）
- ☐ 会場 山王美術館
〒540-0001 大阪府大阪市中央区城見2丁目2番27号
TEL 06-6942-1117
HP <https://www.hotelmonterey.co.jp/sannomuseum/>
- ☐ 入館料 一般1,300円
大学・高校生800円
中学生以下500円（保護者同伴に限り2名様まで無料）
＊学生証をご提示ください。
- ☐ 広報用画像 「ARTPR展覧会情報」からも、
広報用画像の申請・ダウンロードが
できるようになりました。
下記URLもしくは右のQRコードから
お申込みください。
<https://www.artpr.jp/sannomuseum/185th-renoir>



広報について

このプレスリリースに掲載されている広報用画像①～⑫につきましては、画像データをプレス掲載用にご用意しております。また、読者プレゼント用招待券もご提供しております。

「広報用画像使用申込書」に必要事項をご記入の上、FAXまたはe-mailにてご連絡くださいませ。

[お問合せ先]

山王美術館

亀井 里香（かめい りか）

TEL 06-6942-1117

FAX 06-6942-8700

E-mail

r-kamei@hotelmonterey.co.jp

山王美術館について



当館は、ホテルモントレ株式会社の創立者が五十数年にわたり収集したコレクションを公開・展示する美術館として、2009年8月27日に開館し、2022年9月2日に大阪市・中央区に移転しました。

600点におよぶコレクション群は、近代の西洋絵画・日本洋画・日本画・陶磁器・彫刻と多岐にわたり、そのいずれもが「ここでしか会うことのできない芸術作品」です。私たちが今日鑑賞することのできる数々の芸術作品は、幾多の歴史を経ながらも、芸術を愛する人々により守られ、次の時代へと託される、この積み重ねのなかで現在へと受け継がれてきました。山王美術館は、こうした先人の思いや願いを継承し、芸術作品を未来へと守り伝えていく役割を果たすとともに、広く皆さまにご鑑賞いただき、美に触れる歓びと感動を分かちあえる場を創出してまいりたいと考えております。